

## 第34回 北海道建築賞・北海道建築奨励賞 審査経緯

北海道建築賞委員会は3名の委員が交代した新体制で、2009年5月7日、札幌市内で平成21年度の第1回委員会を開催した。審査プロセスとスケジュールについて昨年に順ずることを確認したうえで応募状況を検討し、委員からの応募推薦対象作品を支部主催の「建築作品発表会」他から7作品選び、各設計者に正式な応募手続きを依頼した。

第一回審査会は6月19日に札幌市内で開催され、以下に示す16応募作品に関する審査の冒頭で「④北海道洞爺湖サミット国際メディアセンター」は計画通り解体され実体が存在しない作品であるため、初めての事案として審査対象としての可否が議論された。その結果、現地審査の不可能な作品は、審査の公平性の確保および審査結果への第三者検証の観点から、審査の対象としないことを確認した。したがって、審査の対象作品としては、④作品を除く15作品が残った。

応募作品及び応募設計者（順不同）：

- ①知床斜里複合駅舎（川人洋志君他／川人建築設計事務所他）
- ②GARDEN ECO FACTORY（藤島 喬君／(有)TAU 設計工房）
- ③鳳龍山長勝寺無量寿堂（中舘誠治君他／(有)エヌディースタジオ他）
- ④北海道洞爺湖サミット国際メディアセンター（大山政彦君他／(株)日本設計他）
- ⑤芒居（中山眞琴君／(株)ナカヤマアーキテクト）
- ⑥東京理科大学長万部キャンパス女子寮（垣田 淳君他／(株)竹中工務店設計部）
- ⑦愛国農場の家（小西彦仁君／(有)ヒココニシ設計事務所）
- ⑧新富良野プリンスホテル・温浴施設（林 正彦君／(株)ミクプランニング）
- ⑨ホテル&スパリゾート ラビスタ函館ベイ（高橋秀秋君他／大成建設(株)設計本部）
- ⑩佐藤忠良記念子どもアトリエ（井端明男君／(株)アトリエアク）
- ⑪イコロの森（鈴木敏司君／(株)アトリエアク）
- ⑫札幌市民ホール（菅原秀見君他／(株)北海道日建設計）
- ⑬ROJI（灘本幸子君／灘本幸子建築設計事務所）
- ⑭光の矩形（五十嵐淳君／五十嵐淳建築設計）
- ⑮岩見沢複合駅舎（西村 浩君／(株)ワークヴィジョンズ）
- ⑯西野の家（佐野天彦君／アトリエサノ）

審査の作法は多数決ではなく議論を通じて全委員の同意を得ること、評価の視点は従前同様、

コンセプトと設計プログラムおよび実体的表現の「先進性」・時間空間軸における自然を含めた人間社会に対する「規範性」・それらを統合して美の創造を目指す「洗練度」の3項目とすることを最初に確認し、現地審査対象作品を選定する書類審査に移った。応募資料を読み解きながら、各委員による個別評価と活発な議論の末に、現地審査該当作品（順不同）として以下の8作品、⑤芒居（中山眞琴君／㈱ナカヤマアーキテクト）⑦愛国農場の家（小西彦仁君／㈱ヒココニシ設計事務所）⑩イコロの森（鈴木敏司君／㈱アトリエアク）⑫札幌市民ホール（菅原秀見君他／㈱北海道日建設計）⑬ROJI（灘本幸子君／灘本幸子建築設計事務所）⑭光の矩形（五十嵐淳君／五十嵐淳建築設計）⑮岩見沢複合駅舎（西村 浩君／㈱ワークヴィジョンズ）⑯西野の家（佐野天彦君／アトリエサノ）が選定された。

現地審査は委員7名の過半の参加を原則に4回に分けて実施された。7月23日に岩見沢から苫小牧で第1回、⑮岩見沢複合駅舎と⑩イコロの森。7月28日に十勝で第2回⑦愛国農場の家。8月22日に札幌市内で第3回、⑫札幌市民ホールと、⑯西野の家⑭光の矩形⑤芒居の住宅3件。9月4日に余市で第4回⑬ROJI。いずれも天候に恵まれ、周辺環境から建築空間の内外まで詳細に観察し、設計者やクライアントとの意見交換を含めて有意義な現地審査となった。

最終審査会は9月9日、6委員出席1委員委任のもと札幌市内で開催され、現地審査作品を対象に最終選考が行われた。審査に先立ち次のことを確認した。計画および設計に関与した委員は、当該作品に対する見解表明を避け個別討議の際には座を外す。

選考審査は、各委員が作品に関する見解を述べたのち、作品ごとの自由討議に移り多角的視点から活発で真剣な討議が長時間続いた。やがて、個々の作品の評価と意義が整理され、本委員会の総意として北海道建築賞および同奨励賞について以下の決定をした。

- 北海道建築賞に「岩見沢複合駅舎」西村 浩君／㈱ワークヴィジョンズ
- 北海道建築奨励賞は該当作品なし

「岩見沢複合駅舎」は複雑な設計条件にもかかわらず、地域文化と歴史の読み解きからアイコンとして抽出された〈煉瓦〉と〈軌道レール〉を重要な建築言語として採用し、市民の日常性への細やかな対応を、高度な技術の裏付けで丁寧に具現化し展開した作品である。

細部まで上質に仕上げられた本作品を支える建築家のクラフトマンシップに、現代の物質文明社会で希薄になった建築文化の原点を見る。先進性・規範性・洗練度のいずれでも高い評価を受けての授賞である。

現地審査8作品のうち7作品は残念な結果となったがいずれも佳作であり、評価の要点を以下に述べ、今後の活躍に期待したい。

●芒居：山麓の自然林に接して、鋼板で覆われたキュービックでシンプルな造形は、アプローチに敷かれた鋼板と共に自然な赤錆色の質感が美しい。内部もボーラスな室空間が螺旋的に続く吹抜けで、陶板敷きの床と鉛薄板貼りの壁が工芸的な光の質感を見せる。木構造の可能性に挑戦した各所に見られるRC的な形態操作とパノラマビュー開口。現代建築の論理性を超えようとする先進性と洗練された素材美の表現手法は高く評価されたが、表層的との指摘も受けた。

●愛国農場の家：モジュールに従いリズムカルに並列配置された黒いボックス空間の外観は、人工的な造形美を対置して、広がりのある十勝の大地に新しい農村風景を生み出した。二世代の施主のライフスタイルを読み解き、生産緑地から自立した住環境を都市的手法の伸びやかな構成で実体化した先進性は高く評価された。一方、機能性と規範性の観点から外部仕上げに疑問が指摘されたことが残念だった。

●イコロの森：北海道の気候に適したガーデニング素材とそのデザイン手法の提案、発見、学習のためのランドスケープデザインは、バックヤードと共に運営・維持も含めてサステナブルな場所を創造しようとする大きな構想が具現化され、その先進性は高く評価された。同時に広大な敷地に配置された建築計画は、木造の軽やかな表現を評価しながらも、場所とのきめ細かい応答に具体性を欠いたメッセージ性の弱さが問題とされた。長い時間をかけて有機的空間に進化していくことが予感される。

●札幌市民ホール：7年間の仮設という条件から派生したコスト制約の大きい計画だが、従来の華美に流れた公共建築のあり方とは反対に、無駄をそぎ落とし工夫を重ねて質素ながらも良質のデザインに昇華させた努力と規範性、さらに、鉄骨造ながらホールの遮音性や振動伝播を制御した技術力の先進性は高く評価された。しかし、ホワイエ空間、研修諸室など市民に広く開かれてほしい空間が閉鎖的、外観的にも大通公園に面して閉鎖的で札幌中心部の都市景観への積極的貢献が果たせなかったことが惜まれる。

●ROJI：六面体に三か所の切り欠きを施したシンプルな外観の道路側1・2階に小さな喫茶店を配した店舗付き2階建て住宅建築である。この作品の特徴は、玄関から微妙に屈曲しながら貫通する2枚の白い壁で構成された住宅部の吹き抜け動線空間である。イタリア南部の路地空間をイメージした白く乱反射する光の濃淡は、この小住宅に有機的な息吹を与えていた。施主の夢と希望に必死に応えようと格闘していたら自然に導かれて生まれたデザイン、との作者の弁には熟練した大工の技を引き出した魅力があった。デザインが意識化され論理化されて深められる今後の作品に期待したい。

●光の矩形：前衛作家としての位置を確立している作者による新作は、若い家族のための木造

小住宅である。大壁への反射光を並立する壁の大きな開口によって 切り取った光の矩形が、内部空間を視覚的に統御している。意図的に外部への視線をさえぎり、外部との関係性を光の矩形の変化に限定した手法は、静寂な内部 空間を創出しているが、住まい手に自己完結的な時空間を強いている。しかし、クライアントは作者を信頼し、むしろそこに生ずる自由度の高い現実を楽しんでいた。敷地との関係性において、究極的に閉ざされた建築のあり方に疑義が出されたが、隅々まで細かい配慮がなされた内部は、その洗練度の高さが評価された。

●西野の家：若い家族のために超ローコストで計画された木造小住宅である。構造材と仕上げ合板の定尺寸法から割り出したモジュールで得られた縦長の6面体 空間を、3枚の部分床で再構成した機能空間は、仕切りのない単一空間である。そこは水平に続くテラス空間とも繋がって視点の垂直移動に伴い多様なシーンを 展開する。一見難解に見える空間を自由闊達に使いこなし、若い建築家との共同作業で創り出したライフスタイルに満足なクライアントの姿から、若い建築家と クライアントによる新しい住宅建築の可能性を感じた。今後の作品に期待する。

(文責：大萱昭芳)

## 第34回 北海道建築賞

### 西村 浩 君 「岩見沢複合駅舎」の設計

地域のための建築にどのような価値が必要なのか。その答えを与えてくれた建築である。

4年前のコンペで、主催者である JR 北海道は、「北海道における駅周辺の衰退した現状から、駅が地域における街づくりの核となるように、各自治体と一体となり駅及び周辺整備に取り組みながら駅の復権を目指している」とコンペの目的を述べている。

これに応えるためには、単に建築自体のデザインがどうであるかという視点ではなく、駅が周辺の市街地に対してどのような意味を持ち、そこでの活動が周辺に波及して、駅を建築することが周辺の市街地やそこで活動する人々に失われてしまった活力を再び起こさせるような「取り組み」が必要なのである。

まず、建築の側で持たなければいけないのは、不特定多数の人々が単に列車に乗り降りするという行為だけではなく、多様な活動をするための利用にあらゆる対応することである。この建築には、すべての部分で人間が使うこと、人間が触れること、そして空間を感じることを考慮したデザインが施され、様々な要素を持った複合駅舎として質の高い空間が構築されている。街に向けて大きく開放されたカーテンウォールのガラス壁からは、内部での人々の活動が感じられ、夜間や柔らかな光が、薄暗かった駅前に暖かな光を提供している。また、自由通路部分では、将来の街の発展を支える地域との連絡をスムーズにさせるだけでなく、両側に開かれたガラス壁やその十分な幅員を支える構造が、やはり開放的で軽やかな印象を与え、従来感じることが出来なかった視点から駅や街の中心部の景観を気づかせようという作者の意図が行き届いている。

さらに、昇降口に至っても、床仕上げを内部から駅前広場に連続化させ、通常は工事区分なども問題からなかなか実現できない、駅舎から周辺地区への物理的連続性を人間の心理的、体感的感覚の部分にまで配慮したところなど、作者がこの建築で何が必要であったのかを明確に表し、しかもその作法は秀逸と言えるものになっている。

建築に使われている素材の扱い方についても、先進的な作法が感じられる。用いられた素材は、鉄（古レール）、ガラス、コンクリート、レンガである。これだけ聞くと、もう100年前の初期近代建築のごとくであるが、実は、この素材を用いながら、必要な機能を限られた敷地に構成するために、その素材の特徴をもっとも活かしながら構成しているのである。

駅舎機能で求められる不特定多数の人々が大量に出入りする部分と市民利用などである一定

時間人々が滞留して使う部分とを同時に成立させるためにガラスカーテンウォールと光の透過性を持たせつつ、空気の遮蔽を行うレンガ壁という二重の壁の構成で、室内空間の熱的居住環境を制御しているのである。レンガに 関してもその積み方を必ずしも建築を構築するための構造要素として見せるだけでなく、透過性を持った壁の表現をレンガとフロストガラスと交互に積むことで 実現し、ガラスの外皮とその壁とによって、外部、半外部、内部を積層的に構成し、北海道の積雪寒冷の気候に対応させつつ、駅という不特定多数の人々が日常的に出入りする部分と、滞在し、活動する部分とを併せ持つ、この建築の特徴を平面計画のプログラムとして構成している。素材自体に付着した様々なイメージや意味をいったんそぎ落とし、意匠・構造・設備を一体的に考え、既存の素材に現代の技術を導入して新たな使い方と意味を与えた建築設計としての総合性と先進性に対する作者の高い見識が感じられる。

しかし、これだけの評価に留めるのでは、片手落ちである。これらの建築に対する先進的かつ洗練された構成と表現だけでは、「駅が地域のまちづくりの核となる」ことはできない。

重要なのは、建設のプロセスにある。全国規模の公開コンペによって選出された設計者は、自分の案を実現するということがこのプロジェクトに付託された内容ではないということに最初から気がついていた。

「地域を繋ぐ」ということが設計コンセプトになっているように、市民や駅利用者をこの建築プロジェクトに参加させ、市民、企業、行政が協働しつつ、地域のシンボルである駅舎の姿や利用を考え、それに関わっていくことが、疲弊してしまった地方都市の中心市街地を再生するひとつの手がかりになるということを実践したことが、評価される。国内外から 5,000 名近い参加者を集めた刻印レンガプロジェクトへの参加のシステムや、仮駅舎への感謝を表すイベントから発展した新駅舎や駅前広場で展開される数々の市民の企画によるイベントは、まさに市民が主役で街のシンボルが誕生した証である。その活動の舞台である駅舎には、駅という機能だけではなく、地域の公共（パブリック）としての空間の質を獲得されている。建築家は、単に今までの単体の建築の設計に向かう従来の建築家像を越えた、様々な要素や活動をまさに繋いでいく分野にもその能力を発揮し、建築が出来上がった後の時間に対しても関わっていくというこれからの新たな建築家像を伺わせており、そのことでも高く評価されてよいものである。

地域につくられる公共的な建築には、長い年月や、人々との関わりに耐え、地域の資産になっていくことが求められる。この作品には、きっとそのような建築になっていくであろうと予感させるものが埋め込まれている。それは、この建築に関わった設計者をはじめとする関係者

の想いが読み取れる建築を体感できるからであろう。ここに、北海道建築賞を贈り、その榮譽を讃えたい。

(文責：小篠隆生)